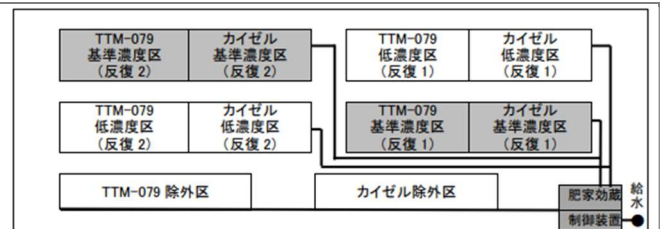


背景・目的

他産地のナスの養液栽培では、収量性の向上を目的として強勢台木を使用した接ぎ木栽培が普及していることから、‘PC 筑陽’を用いて、他産地で導入されている台木の特性や給液濃度の違いが収量及び品質に与える影響を調査しました。

結果

- ・定植 5/27, 収穫期間 6/16~10/31
- ・栽植密度：1条植え、株間30cm、185株/a
- ・主枝2本仕立て
- ・環境制御装置による給液管理（日射比例方式）
- ・給液システム：「肥家効蔵」
- ・ヤシガラ培地「ココバック」
- ・タンクミックスAとBの混合液を液肥原液として使用



<圃場図>

①台木の比較（穂木：‘PC 筑陽’）

- ・ ‘カイゼル’
- ・ ‘TTM-079’

②給液濃度の比較

最盛期の給液 EC の上限を

- ・ 2.0mS/cm とする区（基準濃度区）
- ・ 1.0mS/cm とする区（低濃度区）

① 台木	② 給液濃度	収量 (kg/株)			特性 (cm)	
		A 品	B 品	不良果	果実長	果実径
カイゼル	基準濃度区	4.9	1.5	1.4	21.7	5.8
	低濃度区	4.7	1.8	1.4	21.4	5.7
TTM-079	基準濃度区	4.7	1.4	1.9	21.1	5.7
	低濃度区	4.5	1.5	2.0	21.5	5.7

	基準濃度区			低濃度区		
	液肥混入率	給液 EC	廃液 EC	液肥混入率	給液 EC	廃液 EC
6~7月	0.8	1.2 >	0.8	0.5	0.9 >	0.3
8~9月	1.3	1.9 <	2.4	0.6	1.1 >	0.6
栽培終了時	1.3	2.3 <	2.4	0.6	1.1 >	0.2

※各単位は、液肥混入率が%、ECがmS/cm。

- ・ ‘カイゼル’の方がA品とB品が多かった。
- ・ 両台木とも基準濃度区の方がA品が多いが、廃液ECが高い、即ち、廃液濃度が濃いためにつやなし果が多かった。
- ・ 低濃度区では収穫盛期の廃液濃度が低く、草勢が維持できなかった。

結果の活かし方

台木は、収量性が高い‘カイゼル’を推奨します。給液濃度は、廃液濃度よりもやや高めか同じくらいの濃さになるように液肥混入率を調整しましょう。